

天台教学に説かれる三観をめぐって

宮部亮侑

三観は、天台止観の基本ともいべき観法であり、三諦と密接に連関するものである。その詳細は、天台大師智顛による『三観義』に、

第一に三観の名を釈すとは、三観の名は『瓔珞経』に出づ。一つには從仮入空観、二つには從空入仮観、三つには中道第一義観なり。

(新統蔵五五・六六九下)

として、その出処が『瓔珞経』に説かれることが指摘されている。^①さらに、この三観は四教と並ぶことで天台教観の骨格となり、天台大師のみならず天台家の諸師の著述に広く説かれるものである。

さて、この三観の相は、天台大師による三大部などで次第三観と一心三観との二種に分別されたが、天台大師は『維摩経文疏』(以下『文疏』と略す)において、別相・通相・一心という三種の三観を提示する。特にその第二に挙げられる通相三観は、天台大師の著述のなかでも『文疏』のみに見られる特徴的な観法である。しかし、天台大師が通相三観について言及する著述が『文疏』だけであるためか、先学の研究は様々な見方がされている。

そこで本稿は、天台教学に説かれる三観思想、特に通相三観を中心に、開会との連関について検討するものである。

一 問疾品とは

まず、三種三観が述べられる『維摩経』問疾品を中心に、天台大師がどのような三観釈を行っているのかについて概観してみたい。

はじめに『維摩経』の内容を確認しておく。『維摩経』弟子品・菩薩品は、佛が発した維摩に対する問疾の命に対し、十大弟子と四大菩薩が過去の維摩による彈呵を理由に次々と命を辞す。そこで問疾品より、文殊菩薩による問疾が行われるのである。このような問疾品の意義について、天台大師は『文疏』巻一九(釈問疾品)の冒頭で、

室外の折伏、已に竟ぬ。次に室内の摺受を明す、故に此の品、及び下の五品有りて来れるなり。

(新統蔵一八・六〇八中下、傍線部筆者、以下同)

と示す。文殊による問疾は問疾品以降の章品においても続くが、問疾品は経文の内容が折伏から摺受へ、經典の舞台が彈呵の行われる室外から維摩の住居である室内へと、大きな場面転換が起こることを天台大師も指摘するのである。

また天台大師は、問疾品の来意を『文疏』巻一九で次のように明す。

第一に此の品の来意を明かすとは、淨名大士、不思議の権謀に住して大聖を輔翼し、不思議の眞性解脱を顕じて佛国因果の教を助成す。

前に以て四教を用て凡夫・二乗、及び諸の偏行の菩薩を折伏し、今、四教の三解脱の果を歎じて接引摺受し、三観もて因を修して不思議解脱に入り、淨利を見ることを得て業に随いて往生し、淨佛国土の行を【成ぜ】しむ。故に此の品、及び下の五品有りて来れるなり。

(同六〇八下、新統蔵の校訂により【成ぜ】を補った)

このように、問疾品は「不思議の眞性解脱」を顕かにすることで「佛国因果の教」を出すとされるのである。さらに、天台大師は問疾品以前ま

でが四教によつて折伏が行われたのに対し、問疾品では円教の三解脱の果によつて「接引摂受」が行われ、三観を修すことによつて不思議解脱に入ると捉えているのである。

では、ここで説かれる「不可思議真性解脱」を、天台大師はどのように理解していたのであろうか。天台大師による維摩経疏の別行本である『維摩経玄疏』（以下『玄疏』）巻六・経体では、不可思議真性解脱が、正しく経の体を弁ずれば、この経は不可思議真性解脱をもつて体となす。
（大正三八・五五四下）

として、『維摩経』の経体とされている。また『玄疏』では、「真の諸法実相は、即ち不可思議真性解脱にして、此の経の体なり。（同五五五中）」と、「不可思議真性解脱」の異名として「諸法実相」が挙げられる。さらに、俗諦・真諦・中道第一義諦の三諦に約した法性実相の分別で、

俗諦は但だ是れ凡人所見の理の故に此の経体に非ざるなり。真諦は即ち是れ二乗所見の理にして、亦た此の経体に非ざるなり。中道第一義諦は即ち是れ法性実相にして、即ち此の経の正体なり。
（同五五六上）

とすることで、「中道第一義諦」「法性実相」が『維摩経』の経体として挙げられるのである。すなわち「不可思議真性解脱」は、天台大師が『維摩経』の経体として捉えていた、諸法実相と同義のものである。従つて、天台大師による問疾品の位置づけは、『維摩経』のまさに経体が明かされる、重要な章品として捉えられていたことが理解されるのである。

二 通相三観の前提

このように天台大師が重視した問疾品において、通相三観はどのような場面で説かれるのであろうか。まず『維摩経』の経文である、爾の時、文殊師利、維摩詰に問うて言く、「菩薩は応に云何に有疾

の菩薩を慰諭すべきや。」
（大正一四・五四四下）
といった、慰諭の問いに対する『文疏』の記述を見てみたい。

天台大師は、文殊が維摩に慰諭を問う経文が「信行の人」に対するもの、引き続いての経文で、文殊が「菩薩は云何に其の心を調伏せん。（同五四四下）」と、調伏を問うた一文を「法行の人」に対するものと、二種に分別する。この詳細は、以下のように示される。

初めに文殊の慰諭を問い、浄名の三教に慰諭を明かすを答う、即ち是れ信行の人の為なり。後に文殊の調伏を問い、浄名の三観を用いて調伏するを答うは、即ち是れ法行の人の為なり。

若し信行の人なれば必ず外人の恒に為に法を説き指示分明にするを仮籍して、方に乃ち悟を得、此れは是れ鈍根なり。法行の人は専ら外縁を藉りずして、少しく聞くとくところ有るは、即ち能く觀行して道に入る、即ち利根なり。
（新統感一八・六二五上）

このように、文殊と維摩の慰諭の問答は、大乘である通・別・円の三教によるものとされている。また、慰諭の問いは信行の人の為とされるが、信行の人は鈍根であるため、説かれた法を聞くことよつて悟りを得るのである。それに対し、文殊と維摩の調伏の問答には三観が用いられる。これは利根である法行の人の為であり、「外縁」を借りずとも得道できることが示されているのである。

すると、鈍根である「信行の人」と利根である「法行の人」は、明確に区別されるものなのであろうか。しかし天台大師は、続いての一文で、然りと雖も、此れ亦た必ずしも定んで爾らず。但だ衆生、信・法二行互に利鈍有りて、而も兩種の根性の不同有り。文殊、此れが為に両問を興す。
（同六二五上）

と論じる。すなわち、信・法二行にはそれぞれ利鈍がある上、根性の不同が存在することが指摘されるのである。こうした信・法二行の諸相は、『文疏』巻五（釈佛国品）では、それぞれ大小両乗の根性として、次の

ように分別される。

一に信行の根性を明かすに、二種の不同なり。一には大乘根性の信行人の人、二には小乗根性の信行人の人なり。初めに大乘根性の信行人は、過去に大乘を聞きて戒乗俱に急なり。戒急にして人天に生じ、乘急は還りて大乘を聞き、聞従り悟を得。余の三句の得失の不同、前に類して知るべし。次に小乗根性の信行人は、過去に小乗を聞き、戒乗俱に急なり。戒急にして人天に生じ、乘急にして還りて小乗を聞き、聞従り悟を得。余の三句の得失の不同、類して知るべし。二に法行根性を明かすに、亦た大小両乗の根性不同なり。戒乗緩急の四句、信行に類して知るべし。但だ過去に觀行を修し、利根の少しく聞にして自ら惟いて理を見るを異と為すのみ。

(同四九二中下)

こうした戒乗四句によつて、様々に捉えられる利鈍の違いに対し、天台大師の釈は慰諭と調伏の問答を二種に分別し、それぞれ四教と三觀とを配するのである。

では四教による慰諭については、どのように説かれるのであろうか。これは、文殊が維摩に慰諭を問うたのに対する維摩の答えである、經文の、

維摩詰の言く。「身は無常と説きて身を厭離せよと説かざれ。身に苦有りと説きて涅槃を樂えと説かざれ。身に我無しと説きて而も衆生を教導せよと説け。身は空寂と説くも畢竟寂滅と説かざれ。」

(大正一四・五四四下)

についての釈に、以下のよう説かれる。

今三教を明かすは但だ菩薩を慰諭して二乗を取らず。然る所以は、二乗は慈悲無く涅槃に入るを以てなり。

三藏・通教は共に一教を成じて慰諭するは、界内の有為縁集の見思の疾、未だ断ぜざるの菩薩を慰諭す。是の菩薩、界内の分段の因果

天台教学に説かれる三觀をめぐつて

の実疾有り、故に須く三藏教を用いて通教大乘を助け、而して慰諭すべし。亦た兼ねて別教・円教を用いて慰諭することを得るなり。若し別教を説きて慰諭するは、正しく無為縁集有るの菩薩を慰諭するが為なり。是の菩薩、塵沙無知の変易の因果の実疾有り、故に須く別教大乘を用いて慰諭すべし。

若し円教を説きて慰諭するは、正しく自体縁集有る菩薩を慰諭するが為なり。是の菩薩に法界無明・自体不成実の因果の疾有り、故に須く円教を用いて慰諭すべし。

(新統蔵一八・六二五中下)

このように、藏・通教は有為縁集の見思の疾を断じていない菩薩(界内の分段の因果の実疾)を慰諭し、別教は無為縁集を断じていない菩薩(塵沙・無知の変易の因果の実疾)を慰諭し、円教は自体法界縁集を断じていない菩薩(無明・自体不成実の因果の実疾)を慰諭するものとされているのである。

ただし、藏・通教には別・円が兼ねて用いられると述べられることに注意が必要であろう。この手がかりは、先に引いた維摩の經文「身は無常と説きて身を厭離せよと説かざれ。」の釈のなかで、通教に約した慰諭を説く箇所に見ることが出来る。

經に「説身空寂而不説畢竟寂滅」と言うは、若し声聞は法を析して偏真に入りて、永く寂す。菩薩は爾らず、若しは析し若しは体して、仮実二空に入りて、中道の理有るを知りて、偏真を以て究竟と為さざるなり。是れ則ち復た仮従り空に入り、若しは析し若しは体すと雖も、俱に中道に入らんと欲するの喩なり。

(同六二五下〜六二六上)

これは、析・体といった方法が、中道に入ろうとする喩胤となることを明確に述べた一文と理解できよう。すなわち、通教では中道が説かれないうことが前提となるが、声聞の場合は析法によつて偏真涅槃に入るとされる一方で、菩薩の場合は析・体を用いたところで、入空するの

みにとどまらず、さらに中道に向かうことが明かされるのである。

三 通相三観とは何か

では、三観による調伏は『文疏』でどのように説かれるのであろうか。特に『文疏』で説かれる三観は、別相・通相・一心の三種三観のうち、通相三観によるものである。ただし、そもそも三種三観が引かれるのは、「法行の人」に対して「実疾」を「調伏」するための観法であることを念頭に置く必要がある。そのため、問疾品において文殊が維摩に疾の調伏を問うたことに対する経文である、

維摩詰の言く。「有疾菩薩は心には是の念を作すべし。今、我が此の病は皆な前世の妄想・顛倒・諸煩惱従り生ず。実法有ること無し、誰れか病を受くる者ぞ。」
(大正一四・五四四下)

についての総釈として、天台大師は『文疏』巻二で次のように述べる。これは是れ第二に浄名の答、正しく三観に約して調伏を明かす。然る所以は、三観もて三種の煩惱を破す、即ち是れ三智を明かすを修して、界外の通教・別教・円教の三種の菩薩の実疾を調伏す。亦た是れ三土の菩薩の因果の実疾を調伏するなり。

(新統蔵一八・六二七上)

すなわち、三観によつて調伏を明すのは、通・別・円の、大乘三教の菩薩の実疾が対象となつてゐることが理解できる。つまり、四教と三観とをそれぞれ別個のものとして捉えるのではなく、それぞれがどのように対応するのかを精査する必要がある。

一方で四教と三観との相関については、

今、須く更に略して三観の相を分別すべし。三蔵教の菩薩は既に真を見ざれば、須く論すべからざるなり。若し通教の菩薩は、但だ二諦に約して三観を作すも、実を覆おほむれば只だ二観を成じて第三観無

し。浄名の今答の正意に非ず。今、但だ別教円教の二種に約して、以て三観の相の同じからざるを簡別すれば、則ち三種有り。一には別相三観、二には通相三観、三には一心三観なり。(同六二七上中)と示される。すなわち、三蔵教は真を見ないために論の範疇外とされ、通教は中道観がないために維摩の正意が表されないと扱われるのである。そのため、三観は別教と円教であり、別相・通相・一心の、三種三観の存在が示される。

こうして、天台大師は三種の三観の分別で、

別相三観はまさ的しく別教に在り。歴別に三諦を観するなり。若し通相三観と一心三観とはまさ的しく円教に属す。今此の経は室内の六品にして三観を明かす、正しく是れ通相三観の意、或いは一心三観を用うるなり。
(同六二七中)

と述べ、別相三観は別教・通相三観は一心三観と同じく円教であるときれる。すなわち別教所撰の別相三観と、円教所撰の通相三観・一心三観は、本来大きく隔たるものとして捉えられるのである。

すると、通相三観の特徴とは、どのような点に見いだすことができるのであろうか。通相三観は、その従仮入空観の場合は、空を観するなかで真諦と中道第一義諦も空であると観する観法であり、例えば通相三観の従仮入空観が説かれるとされる『文疏』巻二三(釈観衆生品)では、詳細が次のように説かれる。

菩薩の仮従り空に入る時、同じく入空一切智の名に拠ると雖も、即ち三諦を見て三智を具すなり。故に釈論に云く、「三智は実には一時に得るも、人に説くに解し易からしめんと為して次第分別を作す」と。若し能く是の如く空に入りて一時に三観を具さば、入空を用いて初観の名に当つると雖も実に三観を具す。
(同六四五中下)

すなわち、菩薩が従仮入空するときと言う「空」というものが、「空」といつてもそこに三諦を見て三智が具されている「三諦の空」であり、「従

仮入空観」というなかに、すでに三観が具されているのが通相三観であるとされるのである。

このような通相三観に対し、『三観義』に説かれる別相三観の従仮入空観は、入仮の観を修することとして、次のように示される。

言う所の従仮入空観とは、無にして而も虚設す。之に目して仮と爲し、仮を観じて無を知る、之を入空と名く。若しは諸法は如幻如化にして但だ名字有りと観すれば、即ち真諦に入るなり。而して説きて二諦観と爲すは、或は情智の二諦に就き、或は随智の二諦に約して観する耳。
(新統蔵五五・六六九下)

ここで説かれる「入空」とは「仮を観」じて「無を知る」ことであり、また二乗と大乘との違いは、析空と体空との違いとして、

二つに観門の不同を明すとは、即ち是れ析・体の二種の観門なり。声聞經に明すところの析仮して生・法の二空に入るが如きは、此れ実手の拳指を空するが如きなり。

摩訶衍の体仮して生・法二空に入るとは、鏡像の拳指を空するが如きなり。析仮入空を名けて拙度と爲し、体仮入空を名けて巧度と爲す。
(同六七〇中下)

と述べられる。すなわち、天台大師は拳手の譬喩を用いることにより、拙度と巧度の違いを指摘するのである。こうした従仮入空の他、從空入仮・中道第一義という三観を次第して修す別相三観は、『三観義』巻下・会乘義に、

若しは別教の菩薩は、因縁仮を観じて別相三観を修し、次第に一切智・道種智を成じ、乃至中道観を修して佛性を見て一切種智を成じ、常住涅槃を求むるは、即ち是れ別教大乘の義なり。(同六七五下)と、別教菩薩が修すものであり、別教菩薩が佛性を見るのは前二観を方便として修した上での中道観であることが示されるのである。

一方、いずれも円教の観法である通相三観と一心三観の違いについて、

天台大師は『文疏』卷二一で、

問う。此の両観は既に並びに是れ円教なり。何の意ぞ両となすや。答えて曰く。通相三観は通に約して円を論ず。此れ恐らくは是れ方等教にして方便を帯びるの円なり、法華に明かすところの如きに非ず。
(新統蔵一八・六二七中)

として、通相三観は特に「通に約して円を論ず」る観法であることを示すのである。また、天台大師は「法華に明かすところの如きには非ず」と断るが、天台大師による五時の分別によれば、『維摩經』が配当される方等時は、藏教から円教までが並立して説かれるとされている。すると天台大師が、「円教」である通相三観によつて『維摩經』を理解しようとしたのは、『法華經』以外の大乗經典も、「円教」という基盤を持っていることを強調しようとしたと考えられるのではなからうか。

ここで『玄疏』卷六・經体を参照すると、天台大師は、
一切の大乗經には但だ一法印有り、所謂諸法実相なり。若し大乘經に実相印有らば、即ち是れ大乘の了義經、聞かば乃ち菩薩道を得べし。もしは諸法実相印のなくんば、即ち是れ不了義經なり。

と示し、大乘了義經として「一切の大乗經」に「諸法実相」の一法印があることを論じている。また天台大師は、『法華玄義』卷一上・七番共解の標章で、
華嚴は兼・三藏は但・方等は対・般若は帶なり。此の經は復た兼・但・対・帶無し、専ら是れ正直無上の道、故に稱して妙法と為すなり。

(大正三三・六八二中)
と述べられる兼但对帶や、『法華玄義』卷二上に説かれる、
又た乳經の一種の因果は広高長、一種の因果は狭下短なり、則ち一

鹿一妙なり云云。酪經は唯だ一種の因果にして狭下短なり、但だ鹿にして妙無し。生蘇經は三種の因果は狭下短、一種の因果は広高長

なり、則ち三麤一妙なり。熟蘇経は二種の因果は狭下短、一種の因果は広高長なり、則ち二麤一妙なり。醍醐経は、一種の因果にして広高長なり、但だ妙にして麤無し。

(同六九二下)

といった五味に約した麤妙の分別のように、三藏経だけは但だ麤であると言われる一方、それ以外の大乗経典はすべて妙という面があるという、經典観を根底に持っているのである。こうしたことから、四教が並び説かれるとされる『維摩経』を、円教で解釈する観法が説かれたことが推察されるのである。

四 通相三観と開会

ここで、天台大師が『維摩経』を円教で解釈する観法を設定した意図を、別の側面から検討したい。天台大師は、通相三観について「法華に明かすところの如きには非ず」と述べたことは、先に見たとおりである。確かにこうした天台大師の見解は、『法華玄義』巻九上(体玄義) 円門入実の観にも、次のように述べられる。

復た次に、更に破会に約して融と不融の相を明すに、若し外道の邪見を破すれば、二乗の邪曲は破せず、亦た大乘の方便を破せず。又た会すれども円ならざれば、浄名の中の如し。凡夫の反復を会すれども、声聞は無きなり。塵勞の儔を会して如来の種と為すも、無為にして正位に入るは、反復すること能わず。生死の悪人・煩惱の悪法は而して皆な会さるも、二乗の善法・四果の聖人は而して会せられず。

(大正三三・七八八上中)

つまり、「開会」という視点からすれば、人法ともに開会されていないとされる方等經典の場合、声聞の開会が明かされないために開会が円ではないとされるのである。こうした天台大師の姿勢は、『四教義』巻一一・通諸経論に、

問うて曰く。方等大乗も亦た四教を具す、何が故ぞ五味の義を成ぜざるや。

答えて曰く。声聞の作佛を明かさざれば、五味の義を成ぜず。不定の中に約して、四教を論ずることを得るなり。釈迦出世に有るところの経教は、更に此の四教に過ぎず、此の諸経を撰するに罄しく尽きざること無し。

(大正四六・七六八上)

と、方等經典では衆生の機根が「声聞の作佛を明かさない」ということにより、五味が整ったものとして扱えないと記されることから、一貫したものであると捉えてよいであろう。

このように、方等經典では開会がなされていないことを天台大師は主張するが、その一方で、『玄疏』巻八(教相) 研詳去取では、

若しは此の経(『維摩経』)のこと。筆者注) は是れ第二時教・或いは第三時の説にして未だ佛性常住を明かさずと言わば、此の経には不思議の眞性を明すに、眞性は豈に佛性に非ずや。

若し常住を明さずと言わば、此の経に云く「如来の身は即ち是れ金剛の体なり、衆悪は永く尽し衆善は普く会す、当に何の疾有るべけんや」と、豈に常住に非ざるや。

次に、若し此の経は是れ眞宗の教にして法華に過ぐと言わば、何が故ぞ諸の声聞の人、此の経中に於て佛性を見ること、法華・涅槃に同じからざるや。

(大正三八・五六一下)

として、『維摩経』は経意として不思議眞性解脱が明かされ、佛性常住が説かれるとされている。ただし、『法華経』に過ぎるとの問題提起についても、声聞の人は法華・涅槃と同じく佛性を見ることが述べられているのである。

ならば、天台大師の主張は矛盾するものなのであろうか。ここで引用した『玄疏』は、詳細を『法華玄義』に譲っている。そこで『法華玄義』を参照すると、巻十下で通の五時について、

若し方等教の半満相對するは、是れ生蘇の教なり。別して論ずれば是れ第三時なれど、通じて論ずれば亦た後に至る。

何となれば、『陀羅尼』に云く。「先に王舍城に於て諸の声聞に記を授け、今、復た舍衛國・祇陀林の中に於て、復た声聞に記を授く。昔、波羅奈に於ても声聞に記を授く。身子の云く、世尊は虚ならず、言う所は眞実なり。故に能く第二・第三に、我れ等に記を授く」と。

故に知ぬ、方等は法華の後に至ることを。(大正三・三八〇九下)と、方等經典が法華の後に置かれることが、『大方等陀羅尼經』を經証とすることで述べられているのである。

ここで説かれる一文は、あくまで「通の五時」といった観点であるため、方等經典のみが特別な扱いをされているわけではない。ただし天台大師の經典觀は、先に見た『玄疏』や、『法華玄義』卷八上(体玄義)に、「大乘經は但だ一法印あり、諸法実相を謂う(同七七九下)」といった、すべての大乘經典に諸法実相が説かれるという広範な視野の元に形成されていた。すると、天台大師の立場は、經典の内容そのものは法華や涅槃と同じ意義を認めながらも、『維摩經』の対告衆は機根が整っていないため、人開会がなされていない、と考へてることができないだろうか。そのため、天台大師は『玄疏』末尾(卷六)で、

但だ教相の義は多く関するところ有り、最も解し難く明し難しと爲す。『法華玄』に四教を弁ずるの義は、方に得べし。略して大意を見ん耳。

佛法は不思議なり 唯だ教相は解し難し

二乗及び菩薩の 尚お測る能わざるところなり

何に況や諸凡夫をや 而るに此の事を判ぜん欲せば

譬えば生盲の人の 日輪相を分別するが如し

(大正三・八・五六二中)

といった、教相は理解しがたいものであることを強調する際に、偈文を

天台教学に説かれる三觀をめぐって

付すことで、凡夫には教相が難解であることを繰り返すのである。すなわち、天台大師は經典に円教が説かれる一方で、經典の内容に即して『維摩經』は衆生の機根が整っていないとし、開会が説かれていないと判定したことが推察されるのである。

なお開会をめぐってはまだ検討すべき課題も多い。引き続き検討を行いたい。

註

(1)大正二・四・一〇一四中参照。ちなみに『望月佛教大辞典』『三觀』の項(一四八八頁)では、『三觀義』と同内容である『維摩經玄疏』卷二(大正三・八・五二五中下)を引き、出処が『瓔珞經』であるとしている。

(2)天台大師の三觀思想を次第三觀と一心三觀に分別する方法は、福田堯穎師が『天台学概論』(三省堂・一九五四年)において、開会との連関を含めて指摘している(一〇一―一二頁)。また天台大師の三觀思想がどのように展開したかについては、佐藤哲英博士「三諦三觀思想の起源に關する研究」(同『天台大師の研究』百華苑・一九六一年)、同「三觀思想の起源及び發達」(関口真大編『止觀の研究』岩波書店・一九七五年所収)に詳しい。

(3)佐藤前掲論文の他、三觀思想の構造に着目する研究として、日比宣正博士『唐代天台学研究』(山喜房佛書林・一九七五年)、新田雅章博士『天台実相論の研究』(平楽寺書店・一九八一年)などがある。ちなみに福田前掲書では、通相三觀についての言及が管見では見られない。

(4)『摩訶止觀』卷五上の場合も、信法二行について「若し根の利鈍を論ずれば、法行は利なり、内に自ら法を觀するが故に。信行は鈍なり、他に藉りて聞くが故に。又た信行は利なり、一たび聞きて即ち

悟るが故に。法行は鈍なり、法に歴て觀察するが故に。或いは俱に利・俱に鈍、信行の人は聞慧利にして修慧鈍なり、法行の人は修慧利にして聞慧鈍なり。(大正四六・五七上)として、それぞれの得失が述べられている。

(5) 因果の疾については、木村周誠稿「天台大師における衆生と中道——『維摩經文疏』を中心に——」(『佛教文化学会紀要』一四・二〇〇五年)に詳しい。

(6) 拙稿「三種三観の関係について」(多田孝正博士古稀記念論集『仏教と文化』所収・二〇〇八年)、また菅野博士「智顛と吉蔵の法華經觀の比較——智顛は果たして法華經至上主義者か?——」(平井俊榮博士古稀記念論集『三論教学と仏教諸思想』所収・二〇〇〇年)を参照されたい。

(7) 大正二一・六四九下。

本論文は、天台大師による教観二門の構造のうち、観門に属する「三観思想」について、研究するものである。

三観思想は、從仮入空・從空入仮・中道第一義諦という三観を、別相・通相・一心の三種の三観として分別することで、具体的に三観をどのような手順で観するのかが述べられるものである。この三種三観は、天台大師最晩年の著述である『維摩経文疏』に説かれるものであり、特に第二に挙げられる「通相三観」は、天台大師の広範な著述のなかでも、『維摩経文疏』にのみ見られる観法である。

一方、天台大師の三観思想は、『維摩経文疏』が著述されるまでに、別相（次第）・一心という二種の三観説が、三大部などで示されていた。その天台大師が、『維摩経文疏』に至ってどのような意図のもとに三種三観を提示したのか、天台大師が『維摩経文疏』の完成を見ることなく示寂したことも一因であろうが、その著述には明確ではないのである。それに対し、『維摩経文疏』と同様に、天台大師が維摩経疏として著述したものは数多い。それらには「通相三観」を直接見ることはできないが、一方で残された内容から、天台大師の思考が見えるのではなからうか。

本論文は全二部で構成されている。その目次は、以下の通りである。

第一部 中国佛教における教相と修道

第一章 菩薩の修道論——頓悟をめぐる一考察——

第二章 天台大師智顛の經典観——維摩経をめぐる——

第三章 天台観門をめぐる

第二部 三観思想の基礎的研究

第一章 三観の諸相

第二章 中国天台諸師における通相三観釈

第三章 日本天台諸師における通相三観釈

第四章 天台大師と通相三観

第五章 天台における慈悲をめぐる

第一部では天台大師における三観思想を扱う前提として、天台大師の思考において、教相と修道の両面の基盤となったものを整理するものである。

まず第一章「菩薩の修道論——頓悟をめぐる一考察——」は、中国における佛教受容期の修道論に着目し、小頓悟と大頓悟との立場の違いを論ずることで、中国佛教の根底となるものを基礎的に考察した。

第二章と第三章は、天台大師の思想における教相と修道の両面について、その一断面を論ずる。第二章「天台大師智顛の經典観——維摩経をめぐる——」は、本論文が天台大師の維摩経疏を中心に考察するため、その土台となる天台大師の經典観、特に維摩経観を確認した。一方、第三章「天台観門をめぐる」は、『摩訶止観』積名章を整理し、「止」「観」それぞれを天台大師はどのような意味として捉えていたかを述べ、観門について基礎的な考察を行った。

第二部「三観思想の基礎的研究」は、本論文の主論題である通相三観を中心に、天台大師の三観思想について述べるものである。

まず第一章「三観の諸相」は、三種三観、特に通相三観を論ずる前提として、三観についての規定を整理した。

続いて第二章「中国天台諸師における通相三観釈」と第三章「日本天台諸師における通相三観釈」は、通相三観に対する諸師の解釈が、中国・日本それぞれにおいてどのように展開したかを述べたものである。特に天台大師以降、いわゆる五時八教の教判論が主流となるに伴い、『維摩経』を円教で理解する通相三観は、複雑かつ精緻な解釈が行われるようになっていったのである。そこで第二章では山家派・山外派それぞれの通相

三観釈を、荊溪大師湛然・孤山智円・法照の三師の通相三観釈によつて検討した。また第三章では、『法華玄義』に述べられる円融三諦と隔歴三諦をめぐる議論から、宝地房証真・慧澄痴空・大宝守脱の三師の通相三観釈を比較検討した。

第四章「天台大師と通相三観」から、再び天台大師による『文疏』の記述に戻り、天台大師が意図する三種三観の構造を、通相三観を中心に考察したものである。そこで三観が四教にどのように配当されるのかを検討した上で、通相三観が円教とされる理論を解明した。

第五章「天台における慈悲をめぐる」は、天台大師の慈悲釈を、『維摩經文疏』巻二三・積観衆生品の空をめぐる議論より検討した。特に經典において維摩が空を説くことを、自行化他の両面における慈悲となることを、天台大師が通相三観を用いて論証したことを考察した。

こうして本論文は、天台大師が通相三観という観法を設定したことにより、『維摩經』は教観ともに実相に到達できる經典であることを実証するものであり、またこの根底には、教説を聞く衆生の機根は様々であっても、經典は「大乘」であることを強調しようとする意図があったことを結論とした。